山家宿の追分石

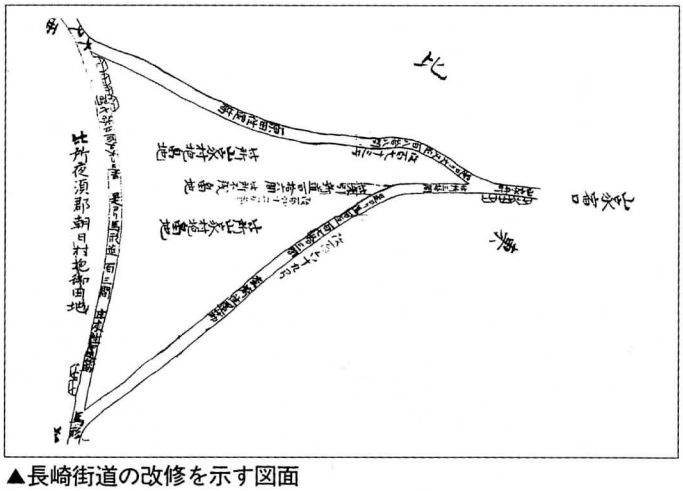
▲追分石

江戸時代、海外文化の門戸となった長崎へ通じる「長崎街道」は、今でいうと幹線国道にあたります。その沿道の宿場が筑紫野市内に２ヵ所あります。山家と原田です。

国境の原田につぐ山家は、難路の冷水峠を挟んで内野、飯塚、木屋瀬、黒崎へとつなぐ筑前六宿の一つでした。山家宿の西構口に近い往環筋・大又に建立されていたと思われるのが、右写真の追分石（道標）です。この石碑は現場から撤去された後、数奇な運命をたどり、現在は市の歴史博物館「ふるさと館ちくしの」玄関に保存展示されています。

高さ１mほどの花崗岩の切り石で、表に「右肥前 太宰府・長崎 原田」「左肥後 久留米・柳川 松崎」と筆太い文字が刻まれています。いつの時期に誰が石碑の建立にかかわったのか謎でしたが、建立年代については、裏面にある「世話人・問屋武作」の文字を手掛かりに調査した結果、武作という人物が1861年（文久元）に問屋の職を譲っていることから、それ以前の建立とわかりました。

1864年、庄屋たちが郡代役所に提出した文書から、これまでの原田宿と松崎宿への道筋２本が１本（現在の旧道）に改修され、日田街道に合流する長崎街道上の大又に番所と関門が新設されたことがわかりました。宿泊所の新設も陳情されています。別の図面によると「御番所」「御関門」と「御番宅」がはっきり図示されています。番所は新往還が日田街道（博多～二日市～甘木～日田）に突き当たった場所で、その右手の日田・薩摩街道口に関門がありました。

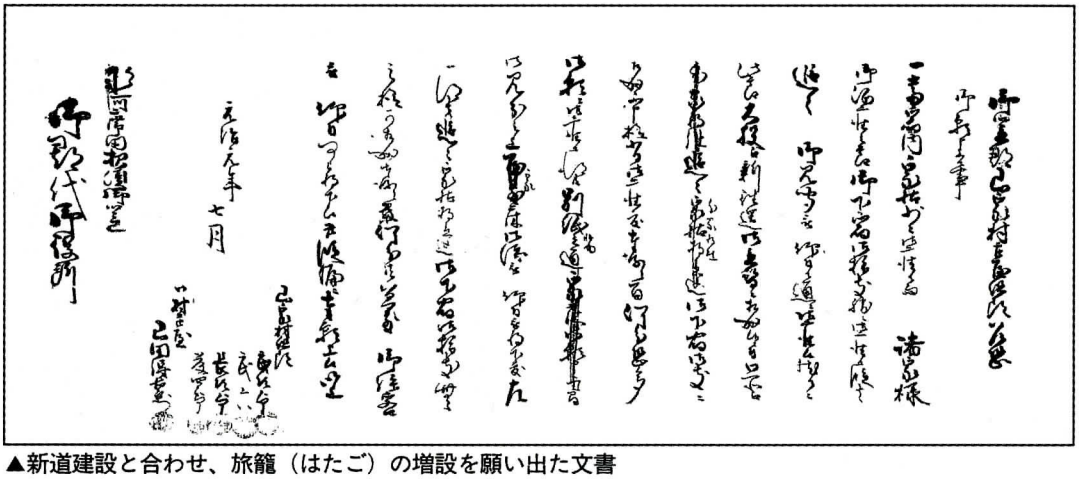


▲長崎街道の改修を示す図面

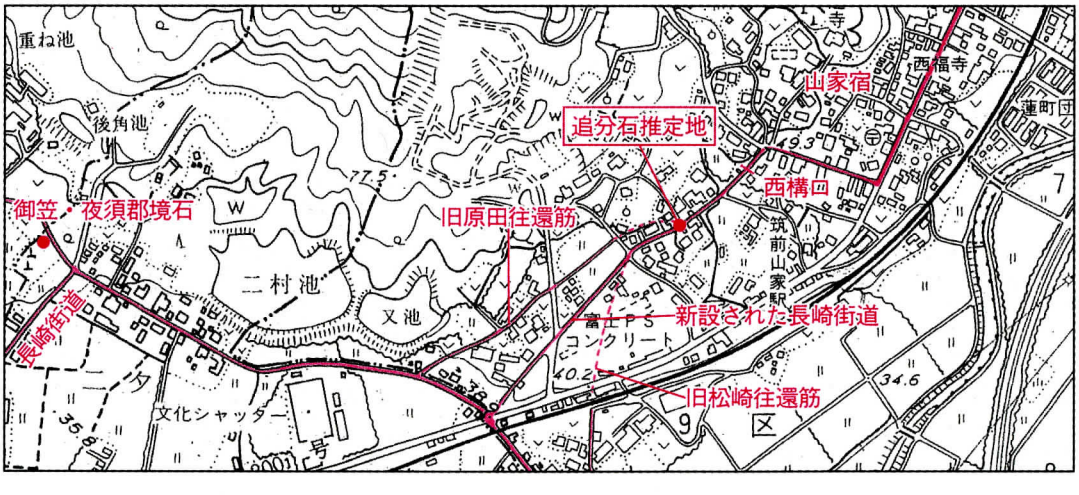
問屋武作は街道往来の人馬の継ぎ立てをした問屋場（屋号は御笠屋）の主人でした。幕府や藩主ら役人の動きは点検できますが、旅籠13軒に泊まる旅人の宿帳は毎日記録の上、月末までに代官所に提出することが義務づけられていました。２泊は禁止で、それ以上の場合は届けて指図を受けるなど、厳しい監視の目が光っていました。

関番所の役人についても1864年（元治元）、藩はこれまでの３ヵ所から新たに山家、杷木、木屋瀬など数ヵ所に増設、専任の藩士と関番を配置しました。山家には藩士と下代など10人が一昼夜交替で勤務しています。

当時の山家宿に関して最近の調査から主な記録をたどってみると、寛延年間(1748～50)に参勤交代のため薩摩、肥後、肥前、筑後の大小各藩主が相次いで通行したことを同宿郡屋守が記録しています。ある藩主の場合、その随伴者数が最大で1500余人とあります。それに旅人や異国人達を加えると、１年間数万人がこの山家宿を通過して江戸、大坂、長崎や九州各地に向かったと推定されます。宿場代官や旅籠関係者の繁忙ぶりが想像されます。幕末になると、尊王攘夷や倒幕運動に動く人々で、政治や経済面でも物騒な世情となっていました。中でも、尊王か佐幕かで揺れ動いた福岡藩は、その治安維持のため、特に宿場周辺の警戒を厳重にしたと考えられます。



▲新道建設と合わせ、旅籠（はたご）の増設を願い出た文書



2000. 3.31. 発行
2012. 3.22. 第2刷 発行